

## カルヴァン研究

倉 塚 平

The Political Thought of Calvin  
and Calvinism

Taira, Kuratsuka

本年度の私の研究対象は Calvin の Genève Theocratie 形成に際し、激しく彼の神学理念と抗争した Michael Servetus の思想を追求することにあつた。

従来わが国においては、キリスト教の根本原理の1つたる三位一体観に対して徹底的なアンチ・テーゼを提出した世紀の異端ミカエル・セルヴェトゥスに対する研究は殆んど全くなされていないといつても過言ではない。僅かに渡辺一夫氏「ある神学者の話——ミシエル・セルヴェの場合——」（岩波新書『ルネサンス断章』所収）があるくらいのものである。それもセルヴェトゥスの原典にあたつて書かれたわけではなく Augustin Dide: Michael Servet et Calvin (1907) に依拠し、宗教的寛容の問題を主として論じたものにすぎない。また欧米諸国においても、宗派的評価が混入して、いまだ Servetus の全体像を完全に明らかにしているとはいえない（もっとも R. H. Baniton や Morse Wilbur のすぐれた研究が現われるに至つたが）。その点で、この研究をわが国で行なうことは、はなはだしい困難に逢着するのであるが、一応彼の思想形成過程を16世紀の特殊スペイン的状况との関連においてとらえることを試みた次第である。

さて、宗教改革は、いわゆるプロテスタンティズムという概念で一括されうような単一のイデオロギイないし運動ではないし、ルター主義アナバプチズム、ツヴィングリ主義、カルヴァン主義、アングリカニズム等々の数個の宗派を構成要素とする複合現象でもない。それは史上かつて見ないほどのキリスト教普遍世界をおおう全民衆的規模をとって醗酵した巨大なる精神の覚醒運動であり、その運動は秘かなる個の内奥の魂によって担われたかぎり、無限の彩りと無限のパラエティをもっていたのである。そして、この無数のアクターたちのうち慧星の如く出現しひとときわ耳目をそばだた

せた悲劇的な1人の異端としてセルヴェトゥスがいたのである。彼は血液肺循環の発見によって科学史上記憶にとどめられ、またその悲劇的殉教によって今なお正統派カルヴァン主義者の胸に悔恨の念をうずかせ続けているが、彼の歴史的意義はそれのみに止まらず、彼の最大の主張たる反三位一体論がソシニアニズムに受け継がれ、やがて正統派的ドグマを喰いつぶし、近代の宗教的個人主義を生みだす秘められた1つの原動力となった点にある。そして彼の反三位一体論の客観的背景は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教が激しく対立していた15, 6世紀の特殊スペイン的状况にあり、3宗教の平和的共存をもたらすために、彼は「躓きの石」たる三位一体を批判したのである。ステファン・ツヴァイクが、セルヴェトゥスを批して、「ひとつの問題からつぎの問題へとたえず鬼火の如く揺れ動くファウスト的精神の持主」といつているが、ルネサンスの万能人ではあつても、決して知的宗教的ダイレクタントではない。特殊スペイン的状况を克服せんとするヒューマニズムと宗教的寛容の精神こそが彼の思想の根底に存在し、彼の生涯を1本の赤い糸となつて貫いているのであり、このヒューマニズムの中に中世以来の汎神論的神秘主義、ノミナリズムの合理主義、ネオ・プラトニズム、改革派左翼のマナバプチズムが渾然一体となつて取り入れられ、絢爛と花咲くに至つたのである。そしてカルヴァンとセルヴェトゥスの対決は、プロテスタント正統派と1匹狼の対立に止まらず、神と人間とを厳しく深淵をもって距てんとするアルプス以北のすぐれて権威主義的改革原理と、人間を神にまで高めんとする南欧の、抑圧の壁をつき破らんとするどんだの革命的ヒューマニズムの改革原理との対決にはかならなかつたのである。なお詳しくは、『政経論叢』第35巻1号の拙稿「ミカエル・セルヴェトゥスの思想形成」を参照されたい。